

ベルマーク新聞 1月号

発行 公益財団法人ベルマーク教育助成財団 東京都墨田区両国3-25-5 JEI両国ビル9階 〒130-0026 電話 03-5638-2320(代表)
郵便振替口座 00100-7-56035 ホームページ <https://www.bellmark.or.jp/>

ダンボールアートで「夢」をつむぐ

宮西達也さんのオーサー・ビジット



①作ったダンボールアートを持って、宮西達也さんと一緒に ②「これ、いいね」と宮西さん ③まずは額枠の色付けから。色も模様も自由に描いてこう

オレンジと黒に彩られたオバケや妖怪が元気に声をあげるゾ！ 教室でにぎやかにダンボールアートに挑戦するのは小学生5人と中学生7人です。

本の著者が各地の学校を訪ねて特別授業をする「オーサー・ビジット」(朝日新聞社との共同企画)。絵本作家・宮西達也さんが12月7日に訪ねたのは栃木県北の山間部にある日光市立湯西川小中学校(芳賀智一校長)です。

ダンボールアートはとってもカンタン。でも創意と工夫、自由な発想が大切です。額枠にまずは絵の具で柄を色付け。次に薄いダンボール紙に2色のマジックインキで絵を描き、それをかたち

に沿って切り取ってボンドで貼り付けます。台紙のダンボール紙の上に、切り取ったオバケや妖怪を積み重ねて貼っていくので立体的。飛び出してくるようです。

思い思いのタッチで、ウンウン考えながら次々と描かれていく想像上の生き物たち。ワークショップを見守っていた先生や地元の方も手伝って、2時間ほどの楽しい作業はあっという間に終了です。

ワークショップの前には読み聞かせの授業がありました。宮西さんは、自作の絵本を大型のモニター画面に映し出ししながら、中国で150頭のパンダと出会い、日本語の前にまずは中国語でパンダの絵本「我是熊猫」を描いたことを紹介。そ

して、自分が描いた絵本は、自分の子ども時代のことが大きなヒントになっていることを、学校生活をひもときながら物語ります。

「生きてますか!？」。教室が静かなとき突然、大声で子どもたちに呼びかける宮西さんに、みんなおかしいやら恥ずかしいやら。それぞれの表情はその瞬間、生き生きとしてきます。

「勉強よりも、心の中の思いやりや感動、やさしさを大事にしてね。それがみんなをすてきな大人にするんだから」と語りかける宮西さん。

大学を卒業して就職したものの絵本を描きたくてアルバイト生活へ。絵本の原

作を持ち込んだ出版社の人に「へんてこだ」と言われながらも、気に入られ、絵本の世界にデビュー。以来300冊を数える絵本を創作してきた宮西さんのお話に、子どもも先生も吸い込まれていきます。

「お父さん、お母さん、先生たちがみんなをたすけてくれる。たすけてくれる人たちを大事にしようね。その気持ちをもって一生懸命やれば、必ずどんな夢でもかなうんだ」

福田姫里さん(小6)は「『生きてますか!?!』が楽しかった」。伴真奈花さん(中1)も「ダンボールアートはほんとに面白かった」と、感想を語ってくれました。

小6がオンラインでベルマークを学習

栃木・那須塩原市立西小、総合的な学習の時間で

「ベルマークを使って地域に恩返しをしたい」

このように考えたのは、栃木県那須塩原市の市立西小の6年生3人。企画を実現するためにベルマーク運動をもっと知ろうと、11月17日、オンラインで財団職員に聞き取り調査をしました。

同校の6年生は総合的な学習の時間を使って、小学校卒業前にこれまでお世話になった人に恩返しをする「西小感謝プロジェクト」を企画しています。地域社会と密接に関わる那須塩原市社会福祉協議会の職員の方々もお世話になった人たちです。プロジェクトを進めるにあたって社協職員と話し合いをした3人は「ベルマークは地域貢献にも活用できること」を知りました。「ベ

ルマークを集め、貯めた預金で買った備品を寄贈することが恩返しになる」と教えてもらったそうです。

活動を始める前に、ベルマーク運動への理解を深めようと、財団職員に話を聞くことにしました。Web会議ではたくさんの質問を用意していた子どもたち。「ベルマークをたくさん集めるコツは?」「地域に寄贈できた商品の例は?」「備品の寄贈を実現するためのアドバイスをください」などと問いかけてきました。

聞き取りを終えた子どもたちは、「自分ひとりだけでなく、みんなでやるのが重要だと理解できました」「ベルマーク収集を学校みんなに知ってもらえるように頑張りたい」と話してくれました。



後日、先生から届いた写真。オンライン学習後、マーク収集の取り組みが始まった。目標は保存食を買ってフードバンクに寄贈すること